

2

文学作品を評価しながら読む (蜘蛛の糸)

2

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

(芥川龍之介「蜘蛛の糸」)

一 この文章の内容や表現について説明する場合、どのように説明したらよいですか。次の1から4のうち、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 地獄にいた健陀多は、蜘蛛を殺さずに助けたことの報いに、お釈迦様が極楽から垂らした細い蜘蛛の糸をよじのぼって、無事に地獄から抜け出すことができます。このような内容が、現在、過去、未来の表現を複雑にからませ、時間的な広がりをもつように書かれています。
- 2 地獄にいた健陀多は、蜘蛛を殺さずに助けたことの報いに、お釈迦様が救い出そうとしたにもかかわらず、自分だけ抜け出そうとしたため、再び地獄に落ちます。このような内容が、敬体を主としたていねいな文末表現で、読者に語りかけるように書かれています。
- 3 お釈迦様は、蜘蛛を殺さずに助けたことの報いに、地獄にいた健陀多を救い出そうとしますが、健陀多が優柔不断であったため失敗します。このような内容が、作品全体にわたって、お釈迦様の目を通して見ているように書かれています。
- 4 お釈迦様は、蜘蛛を殺さずに助けたことの報いに、地獄にいた健陀多を何とかして救い出そうと懸命に働きかけます。このような内容が、お釈迦様の悲しみと苦しみを際立たせるように、視覚や聴覚などに訴える豊かな比喩を用いて書かれています。

二 次に、「二」の場面の一部です。この部分を朗読する場合の工夫について、あとの問いに答えなさい。(①から⑥は、文の番号を表す。)

①すると、一生懸命にのぼったかきがあつて、さつきまで自分がいた血の池は、今ではもうやみの底にいつの間にかかくれております。

②それからあのほんやり光っている恐ろしい針の山も、足の下になつてしまいました。

③この分でのぼって行けば、地獄からぬけ出すのも、存外わけがないかもしれませぬ。

④健陀多は両手を蜘蛛の糸にからみながら、ここへ来てから何年にも出したことのない声で、「しめた。しめた。」と笑いました。

⑤「ここがふと気がつきますと、蜘蛛の糸の下の方には、数限りもない罪人たちが、自分ののぼった後をつけて、まるで鼠の行列のように、やはり上へ上へ一心によじのぼつて来るではございませぬか。

⑥健陀多はこれを見ると、驚いたのと恐ろしいのとで、しばらくはただ、大きな口を開いたまま、眼ばかり動かしておりました。

